

エコたま



グリーン NEWS

多摩市民環境会議機関紙 第114号(通巻第174号)

2013年12月12日発行 発行人:清水武志朗 編集人:

井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山3-9 東永山複

合施設 301 tel&fax042-376-4572(事務局員は常駐

しておりません) e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp

URL ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp

ごみの減量について徹底受講



環境学習セミナーの今年度最終回(5回目)は12月8日、グリーンライブセンターで行われ、16人の受講者が出席した。講座は4つのパートに分かれ、一つ目が市の資源循環推進担当の磯貝浩二課長による「多摩市のごみ減量政策」、二つ目がたまごみ会議の江川美穂子さんによる「たまごみ会議の活動」、三つ目が浅井民雄当会議副代表による「循環型社会づくりの有機資源リサイクル、生ごみリサイクルの意義」、そして四つ目がこれらを聞いた受講者同士の意見の出し合い。

この話し合いは4ブロックに分かれ、講師や当会議の会員が話し合いの先導役や、出席者の疑問に答える形で参加した。人数が少ない話し合いなので、出席者は自分の思いがきたんなく話せたようだ。

磯貝課長の話の内容。

ごみの減量・資源化がなぜ必要かという、資源需要の増加にともなう資源価格の高騰、枯渇の恐れがあること。そしてごみを捨てる場所がなくなること。市では生ごみ類を焼却処分しているが、残った灰を日の出町にある二ツ塚処分場で埋め立て処分している。その二ツ塚も満杯になるともう埋め立て場所がなくなるため、灰をセメントに混ぜて「エコセメント」にして、満杯になるのを1年でも遅らせようとしている。

さて、日本全体のごみ量の変化では、1968年に2万5000トンだったのが1990年に倍の5万トンに達し、その後も増え続けていたが、2006年にはまた5万トン強まで下がってきている。

多摩市のごみの量は平成11年に4万0694トン(資源ごみ除く)だったものが、同13年には3万1862トンに減った。これは12年にダストボックスが廃止され、戸別収集が始まったため。

その後、平成19年に2万9620トンだったものが20年には2万4454トンに大幅ダウンした。これはごみ指定袋による有料

ごみを捨てる場所がなくなる!

現在、多摩市では、東京都日の出町の最終処分場にごみを持ち込んでいます。日の出町の施設の代わりはありません!



制が同年から導入されたためと思われる。

その後、200~300トン程度のリバウンドはあったが、昨年度は2万4299トンと減量が



江川美穂子さんの活動報告

安定路線に乗ってきたような感がある。ごみ減量の必要性が市民に浸透してきたことの表れともいえよう。

1年間のごみ処理にかかった費用は、なんと25億円。内訳は、ごみを収集して運ぶ費用が9億円、清掃工場の費用が8億円、最終処分場(二ツ塚)の費用が4億円、資源化処理をするエコプラザ多摩の費用が3億円、その他が1億円というわけ。これを市民の数で割ると一人あたり1万7000円。もちろん、処理にかかる費用はすべてわれわれの税金でまかなわれている。

だから、水分が70~80%といわれる生ごみをいかに減らしていくかが、中長期的に市民につきつけられた課題だ。その一方法が堆肥化というわけ。

ごみをへらすのに今日からできることは、いい尽された言葉だが「3R」。リデュース(発生抑制)、リユース(再使用)、リサイクル(再生使用)だ。

リデュースは「ごみ」も「資源」も元から減らすこと。たとえば買い物ではマイバッグを持参し、レジ袋はもらわない。必要な分だけの買い物。料理時には食材を使い切る。使い捨て商品はできるだけ買わない。壊れにくく長く使える製品を買う。

リユースはフリーマーケットやリサイクルショップを利用する。マイはしやマイボトルを利用する。詰め替え商品を購入し、容器は何度も利用する。

リサイクルは生ごみは堆肥化して再利用。商品を購入する場合はリサイクル製品を。分別をしっかりと行い、資源にする比率を高める——以上のような内容だった。

つぎに江川さんの「たまごみ会議」についての話。

およそ13年前、多摩市が市民の自由な発想を生かし、ごみ減量を進めていきたいと公募し、集まった市民によって2007年7月に発足した。目的は「多摩市のごみを減らすこと」。資源化部会と啓発部会があり、課題解決に向けて市と市民が互いに知恵を絞り、様々なアクションを行って、施策を実現させてきた。

資源化部会は、生ごみリサイクル講習会と生ごみリサイクルサポーター制度の提案と実施を行ってきた。

啓発部会は、レジ袋削減に向けて2000年から12年まで、スーパーマーケットで容器包装調査、ヒヤリング、レジ袋辞退率調査、市民アンケート調査、ステッカー・ポスター作製、掲示、「へらそう!レジ袋キャンペーン」の実施。この業績で2004年に「東京都グリーンコンシューマー奨励賞」を受賞した。このキャンペーンは顧客のレジ袋辞退率が50%以上に達したため昨年で終了。

このほかイベント時のごみを減らすため、使い捨て食器ではなくリユース食器を提案(2004年)し、現在実施されている。また「エコショップ認定制度」や転入者へのごみ分別相談窓口の設置(市役所1階)や落ち葉の堆肥化実験など様々な分野で幅広く活動している。(以下次号)

→イベント時には大量のごみが出る



身のまわりの環境地図展、会場で表彰式



第17回となる「多摩市身のまわりの環境地図作品展」は、11月29日から12月1日までパルテノン多摩の市民ギャラリーと特別展示室

阿部市長を中心に製作した生徒や審査員らを使って開かれ、501名とこれまでで最高の来場者数を記録して幕を閉じた。

今回の出展は小学校6校(168点)、中学校5校(137点)の計11校、305点。優秀賞や奨励賞など約20点が選ばれ、会場の正面に貼られた。また、今回初めて表彰式が展示会場の市民ギャラリーで行われ、選考委員の人たちや阿部裕行市長らは、その作品を見ながら作者である生徒たちに質問したり講評を行っていた。

話題を呼んだのは、小学1年生で初めて製作した地図



が「多摩市教育委員会教育長賞」を受賞した「みちかなこうえんのはなのいろ」。製作者は佐伯静琉(しずく)くん。諏訪小学校の1年生。自宅近くの4つの公園の花の色は

どんな色が多いかを調べた。

それも、事前に自分とお母さん、お父さんの3人で「何色が多いか」の予想をし、実際に調べた結果でだれの予想が当たったかまで報告している。実際にはお母さんが予想した白い花が多く、2番目が自分の予想したピンク、3番目がお父さんの予想した黄色だった。

調査日は8月28日から30日まで。「すごく暑くて日陰もあまりなかったので、すごく疲れた」と苦労話を書いている。70種類の花を調べて撮影し、そのうちの59枚を地図に貼って作品を仕上げた。



公園の花の色を調べた作品

①、②など地図に表し、距離やコース中のトイレ、水飲み場、坂道などの情報もしっかりと書き込んでいた。

本人は陸上部に入っているのも、自分でジョギングコースをつくってトレーニングしようと思ったのが地図製作のきっかけ。ただ、夏休みに実際に走って地図づくりをしたので、「とても暑くて途中で何度も休憩をした。市内の自然を生かしたコースなので、アップダウンの激しい部分や緩やかなコースもある」と感想を書いている。

ジョギング路を提案する



また、「国土交通省国土地理院長賞」を受賞した「多摩市ジョギングMAP」(製作者・多摩永山中学校1年生、田村エリカさん)は、自分で多摩市内の4カ所に推奨ジョギングコースをつくり、川

沿いコース①、②、遊歩道コース

これら入賞作品は、ほかの学校の作品も集まる全国的な作品展に出展されたあと、また多摩市に戻ってきて学校から本人たちに返却される。

日比野克彦氏、多摩でアートを語る

12月1日に永山の多摩情報教育センターでは、「第5回ユネスコスクール全国大会(持続発展教育ESD研究発表会)」が開かれたが、その前日の11月30日に多摩市教育委員会と多摩市ESD関連発表を行う清水代表が主催する関連イベントの「ESD多摩地区コンソシアム研究発表会」が、ベネッセコーポレーション第2オフィスのF-Parkで開かれた。



午前中の第1部は「多摩市子どもみらい会議」で、市内10校の小中学校代表による円卓会議(平和で持続可能な社会のための提言)が行われた。第2部は午後から「地産学官と小中学校の交流会(ESDをサポートする地産学官と小中学校の連携・事例発表)」が開かれ、ここには当会議の清水代表や多摩市水辺の楽校の西代学校の教師が話を補足表なども教育機関との提携事例発表を行った。



学校の教師が話を補足

さらに前夜祭として午後6時からアーティストの日比野克彦氏(東京芸術大学教授)による記念講演会が行われた。氏のプロジェクトは新潟の集落にある建物を朝顔の花で覆うという芸術の試みで、これが水戸や金沢にまで広がった。そしてその後も種の形をした船をつくって浮かべたり、それを走らせてみようというエンジンまでつけて実際に海を航海した、というようなおどろきのアート。

氏は講演の前の挨拶部分で「早く多摩センターに着いてしまったのでぶらぶら歩いていたら、(パルテノン多摩の)市民ギャラリーというところで、環境地図展というのをやっており、それを見たらレベルの高さにおどろいた」というような話も披露してくれた。



日比野克彦氏

朝顔プロジェクトは、新潟県の昴平(あざみひら)という20世帯、100人の限界集落で、廃校になった建物を朝顔の花で覆ってしまおうというもの。150本のロープを地上から屋根までかけて、下に朝顔の苗をおいてつるロープに巻きつけて屋根まで伸ばし、朝顔の花に覆われた建物にする企画。結果は成功した。トリエンナーレといって3年に一度行う祭り。

2005年、つぎに水戸の県立の立派な建物に300本のロープをかけて行った。ここには昴平の人たちもバスに乗って参加し手伝った。さらに金沢では2000本というように規模を拡大したり、地域間の交流も行えるようになる。

各地域ごとに朝顔の種の形が異なっていて、金沢の種の形をした船をつくらうということになり、その船をつくって横浜港に浮かべた。このときは無人だったが、鹿児島では船に二人を乗せて浮かべた。そして、ついにエンジンを搭載した船となり2012年、プロジェクトの生まれ故郷の新潟港へ海上を航行して帰ったというのが結末。

このように、ものごとの見方を変えることによって価値を転換させることができ、日常のなかにある「美」を見つめるのがアートというのが日比野さんの考えだ。